

世界システムとアマゾン先住民 ——タゲリへの襲撃をめぐって——

アレックス・リバス・トレド⁽¹⁾/山本誠・訳

(平成20年3月31日受理 最終原稿平成20年5月20日受理)

エクアドル・アマゾンで起こった最近のできごとは、この地域の歴史からみて極めて重要な意味をもつ先住民ワオラニ (huaorani) の存在を広い世界に知らしめることになった。2003年5月、そのテリトリー北限に居住していた親族グループから男たちの一部が未接触グループ (タゲリやタロメナネ、あるいはまた別のクラン) の定住地に侵入し、かつての親族グループどうしの争いごとをたてに26人を殺害したのである⁽²⁾。

エクアドルの内外を問わず、ワオラニが公的な議論の場に身を晒すのは、ほとんどの場合暴力というコンテクストにおいてのことであった。1956年にはプロテスタント系の宣教師がクラライ川で殺害され、1987年にはアグアリコ総代理司祭だったアレハンドロ・ラバカも槍の犠牲となり、1990年代、2000年代になっても入植者、石油関係者、木材伐採業者が襲撃されるなど、様々な事例があげられる。

そのワオラニの暴力は、エクアドルのナショナルな社会に「未開・反文明・野蛮」といったイメージにもとづく彼らのエスニック・アイデンティティが広く定着していく上で、その土台となる見方を提供するものであった。また文化主義的な語り口にしても、結局は「血に飢えた本来的に未開な集団」というワオラニについての一般的な捉え方を支えるものでしかなかった。

この小論では、社会的・政治的視点から、そして社会人類学の有益な知見を取り入れつつ、近年の暴力的襲撃というコンテクストにおけるワオラニをみていくことにしたい。社会人類学の知見は人間の諸社会を経済的側面や政治的状況、文化的価値の交錯する社会システムとして解き明かすための源泉、ある種の篩^{ふるい}となりうるからだ。

またこの文章はグローバル化や世界化 (mundialización)、史的資本主義システムといった現象がアマゾン流域の先住民たちの間でどのような役割を果たしてきたのか、その議論を喚起しようとするものでもある。近年の暴力事件をめぐる議論を通して、この差異化された社会的行為者としてのワオラニの行く末について、いくつか示唆的な事柄を特定することができれば幸いである。

【先住民と世界システム】

この500年において創りあげられた近代文明は、ウォーラーステイン (Wallerstein, 1988) の言う史的資本主義システムに立脚した歴史的、社会政治的プロセスを背景としたものである。

エリック・ウルフは（Wolf, 1987）この世界的なシステムを次のように解説している。つまり、富の蓄積やテクノロジー創出の力をもった＜中心＞が地球の北側に居を定め、その一方で文明化された世界の＜周辺＞地域には、覇権をもつ中心に向けて労働力と自然資源を供給する搾取空間が出現する——そういうシステムだということである。この世界化は文明世界の資本再生産という関心事に向けて周辺の側を経済、政治、文化的に適応させていくことを意味していた（現在でもそうである）。さて、国家なき（ワオラニのような）周辺民族は、この世界システムにおいてどのような役割を果たしたのだろうか？ここでそういう疑問がわいてくる。

20世紀を通じて、人類学者の一部は国家なき周辺民族のテーマにとりくみ、その文化的、歴史的な連続性は中心たる文明のエージェントとの接触の産物であるとして、そこに潜む問題点や（中心との接触の）反響を特定化してきた。その中でも、たとえばアフリカのグラックマン（Gluckman, 1963）やオセアニアのゴドリエ（Godelier, 1996）とサーリンズ（Sahlins, 1988, 1979）、ラテンアメリカのリベイロ（Ribeiro, 1971）やカルドーソ・デ・オリベイラ（Cardoso de Oliveira, 1972）、ボンフィル（Bonfil, 1972）あたりは頻繁に引用されてきた人類学者である。

ラテンアメリカにおける文明化のプロセスは——その押しつけは15世紀にはじまる——あからさまな社会構造の規格化を意味していた。そこではヨーロッパ本国において必要な富を制度的に蓄積する条件として、植民地権力の利害関心に先住民を従属させることが明確に定められていたのである。18世紀にはこの体制はいくぶん修正を加えられるが、黎明期のアメリカ大陸の諸共和国にも引き継がれていく。そして21世紀の初頭には、その世界システムはグローバル化と市場経済の世界化（mundialización）という形をとっている。

こうした歴史的事実が蓄積していくことにより、＜先住民なるもの＞（lo indígena）というカテゴリーは、覇権を握る社会階級の利害関心への従属と被支配を旨とするものとして捉えられるようになっていく（Bonfil, 1972）。ラテンアメリカの先住民たちは、それぞれが多種多様な歴史をもつにもかかわらず、従属と抑圧という条件のもとでのみ世界システムに結びつけられるということなのだろう。そのプロセスは文化的、生物学的、言語的等々、複数の領域を横断するような価値づけのプロセスであり、そのことがナショナルな白人—メスティーソ社会とインディオ社会の差異を徴づけることにつながっていく。

近代化という発想は、文明教化という様式にもとづく止めどない合理的な進歩を想定していた。その文明教化の様式とは地理的、文化的、社会的な相違を考慮せず、都市化、産業化、商業化といったプロセスの中で形成されるナショナルな社会というイメージをもとにアメリカ土着の先住民を同化させていこうとする、そういう様式であった。

ヨーロッパとの接触が遅かったアマゾンの先住民たちについては、支配のプロセスも遅い時期に経験することになる。その多くは共和国の時代になってから、しかも20世紀の全般にわたっての接触であり、人口縮小であった⁽³⁾。

アマゾン先住民とアンデスやメソアメリカの国家（に統合された）地域には大きな文化的差異があり、また共和国時代以降のナショナルな諸社会の登場もあいまって、アマゾンに対する人種的、社会的偏見を根付かせるようなエスノセントリズムがいたる所で発生し、文化的ステイ

グマも刻まれていった。彼らを指し示す際には「野蛮な (salvajes)」「未開の (primitivos)」「人喰い人種の (canibal)」「反文明的 (incivilizados)」といった形容詞が使われ、アマゾン先住民であるということは周辺の極致という位置づけを意味した。とはいえ、そのことが遠く離れた密林の地で自給自足の生活を送ることをいくぶんかは可能にしたわけであり、また自然状態にある文化空間という地域イメージを持続させてきたことにもつながっている。

大いなる自然の豊かさと低い人口密度という意味で、アマゾンの地は資源採取の前線を拡大していくには理想的な場所であった。そのプロセスは、初期の段階ではゴムの採取と金などの鉱物の探索というような性質のものだった。ところが、後になって石油や鉱物、森林については産業的な採取モデルがあからさまに強化されていく。

ここでははっきり言えることは、未開な自然状態として差異化された領域という形でアマゾン先住民を分類することと同様に、自然資源の開発もまた、近代世界システムにおける先住民の役割を決定づけるファクターになるということだ。

【ワオラニ：接触と従属】

このような世界化の結果として、19世紀から20世紀の間に多くのアマゾン先住民が文明との接触を果たしていった。ただしエクアドルのワオラニはその時期までワオラニ (huaorani) として存在していたわけではなく、アウシリ (aushiris) とかアビヒリア (abijirias)、あるいはサパロ (záparos) などと混同されており (Cabodevilla, 1999; Dubaele, 1997; Rival, 1996)、わずかにナボ川の南側とクラライ川の北側に挟まれた約2万平方キロメートルの地域に文明との接触を拒んでいる敵対的な集団がいる、ということが知られていたにすぎなかった。

ワオラニにとって文明との接触はプロテスタント系の夏期言語学研究所 (ILV: Instituto Lingüístico de Verano) から派遣された宣教師にはじまり、それは20世紀後半のことである。初期段階の接触は主として *cohuori* (ワオラニの言語で「外人」「人喰い人種」の意) への拒否反応に終始し、1956年には5人の宣教師がワオラニの槍によって殺害されている。その後60年代から70年代にかけて、接触ずみのワオラニを言語的な仲介役として使う宣教活動が功を奏し、夏期言語学研究所はパスタサ県ティウエノの保護区 (Protectrado) にワオラニのほぼすべてのクランを集結させることに成功した。ところがこの集住の試みは人口増加を招き、先住民どうしの緊張を高め、同時に感染症による死亡率を上昇させる結果を招いてしまう。ミッション側はこのワオラニのテリトリー縮小プロジェクトの失敗を受け、70年代の終わりにはワオラニの集落をかつてのテリトリーの川沿いに分散化させる方針を選択せざるをえなかった。

このような文明との接触がもたらした重要な帰結として、ミッションに組織され (折り合いがよいとはいえない) 姻族に囲まれるようになったワオラニの一部が保護区から逃走し、どのような種類の接触も (武力を使ってでも) 避けるようになったということがあげられる。あのタゲリ・グループは——後年、カトリック系のカプチン修道会宣教師や石油関係者、伐採業者、キチュア系入植者などを槍で殺害し、圧倒的な注目をあつめることになるクランは——こうして誕生したのである。これに並行して、先のプロテスタント系の夏期言語学研究所による集住

計画には参加せず、孤立した生活を維持していたワオラニの未接触グループ、そういう別のグループの一部が後にタロメナネ（taromenane）として知られるようになった可能性もなくはない（Kimerling, 1996）。

世界システムの拡大というコンテキストにおいてみると、ワオラニはエスニック関係の過去と未来をことさらに徴づけるようなラベリングを付されて——夏期言語学研究所の言に従うなら、部族内での暴力が最もはなはだしいアマゾン先住民のひとつとして（Yost, 1978）——登場してきたといえる。ワオラニどうしの戦争による死亡率の高さ、これが接触以前には自明の理であったことから、接触と平定（*pacificación*）の計画実行が正当化されたのである。

殺人者としてのラベリングが付されたことでワオラニは国家による法的な認知の対象となり、それは国からの土地の賦与という形をとった。1969年から1990年にかけ相次いで賦与された土地面積は公正証書で67万8220ヘクタールにおよぶ（Rivas, 2001）。その範囲はワオラニ本来のテリトリー 2万平方キロメートルを含んではおらず、しかもその一部は石油企業やメスティーソおよびキチュア系先住民の入植者により占有されていた。ただ、それでもワオラニの多様なクランがそこそこ自給自足でできるだけの土地だという話ではあった。ところが、そういった条件も、先住民のテリトリーにおける石油開発が合法化されてしまったことから、実質的には反故にされた形である。

夏期言語学研究所の庇護下におかれて以降、ワオラニのテリトリーにおける豊かな石油は産業的な介入の対象になっている。80年代から90年代を通じて、ワオラニは多国籍企業を介してエクアドルの国家社会と関係するようになり、そこで登場してきたのは物心両面にわたる政策的な支援攻勢であった。「先住民開発（*etnodesarrollo*）」と呼ばれる各種の計画、協定が実行に移されているが、資金提供しているのは主として石油企業である。

ワオラニ平定の軌跡をたどると、まずは暴力というアイデンティティ創造が特徴であり、それが後になって産業的な介入や先住民開発に利用されていくようにみえる。*cohuori* への敵対に加え、暴力をめぐる以前からの解釈によって特殊なアイデンティティが創りあげられていき、そのアイデンティティがエクアドル国民に広く浸透し、価値づけされ、そしてエクアドル・アマゾンという環境におけるワオラニが差異化されていくのである。

【アマゾンの戦争：システムのカテゴリー】

アマゾンの諸社会をとりあげる際、戦争や暴力、復讐、死といったテーマはこれまで定番とでもいえるものであった。19世紀、20世紀の旅行者の語り、ゴムや金の採取人の語り空間はそういったテーマで占有されていたし、今日でもプレスリリースや多様な文献資料の一部には同様のものがある。戦争と暴力がテーマとして姿を現したのは、熱帯アマゾンの森における植民地の拡大、自然資源の開発といった歴史の初期段階からのことである。

ここで我々は少し立ち止まって、同一民族内での暴力に特徴があるとしてアマゾン流域のシンボリックな存在となっている2つの先住民の戦争について議論してみたい。ベネズエラのヤノマミ（*yanomami*）とエクアドルのワオラニのことだが、両者とも20世紀に文明との接触を果

たした狩猟採集民である。その目的は暴力と死という現象を2つのプロセスにもとづく構築物だと理解することを通して、本源的な野蛮さという観念に対して疑問を呈することにある。そのプロセスとは、まず第1に近代のエージェントにより展開された暴力的かつ欲得ずくの接触プロセスのことであり、第2には、自然状態における野蛮という観念がアマゾンの先住民アイデンティティに影響を与えていくプロセスのことである。

初期段階の人類学文献では、アマゾンの部族戦争は環境からの制約に加え野生動物やテリトリーをめぐる対立の結果ではないかと示唆されていた (Steward, 1955; Harris, 1995)。またネオダーウィニズム寄りの人類学の出現も、強者の生き残りという解釈を特権化するような発想を推進させたといえる。そうやって戦争の襲撃による死、嬰兒殺し、あるいは老人遺棄などが熱帯の厳しい環境への適応行動として解釈されたのである。

ヤノマミの場合には、ネオダーウィニズム的な枠組のもとで、暴力の源となる遺伝子の探求が行われた。1950年代、60年代、70年代と彼らの遺伝子的、社会的な独自性を研究する目的で血液サンプルが採取され、そういったタイプの研究こそが文化的な相違を基礎づけ、「獐猛な民」(“pueblo feroz”)⁽⁴⁾を説明することにつながるとされたのである。

ヤノマミは西洋と接触したことにより、干渉を受けると同時に実験の対象ともなった。彼らの存在はガリンペイロ (*garimpeiros* アマゾンの金や貴石の採掘人) にとっては不都合であり、またその一方ではこの名高い戦闘集団を説明しようとする調査員や研究者たちを引きつけてやまなかったからだ。荒っぽい、暴力的な資源採取者と場を共有していたにもかかわらず、北米の科学者たちはヤノマミどうしの暴力だけを記述し、創造し、再創造するべく身を投じていった。このヤノマミという人々は人類のたどってきた過去それ自体の一部だと想像したのである (Tierney, 2002)。

ところが、後年になって次のようなことが知られるようになってきた。30年以上にわたってヤノマミを「獐猛な民」として捉えてきた民族誌は、彼らへのはなはだしい暴力と干渉という条件のもとでつくられていたということだ。戦争の暴力と憎悪といった発想のより所となっていた民族誌上のエピソードの中には、現地での意図的な操作の産物すら紛れ込んでいた (Tierney, 2002:51)。また彼らは死をもたらしかねない麻疹ワクチンの実験材料にも動員されており、それは殺人集団というエスニック・イメージの構築と並行してのことであった (Ibíd.)。

ワオラニの場合は、部族内部の暴力と死は最も重要な文化的特徴だとして扱われた。彼らを平定したプロテスタント系のミッション以降、オーラルヒストリーをつなぎ合わせることでワオラニの過去が研究され、その結論は「生まれつき暴力的」⁽⁵⁾というものでしかなかった。そういった調査がなされる一方で、ワオラニはテリトリー統合の対象とされ、生業や食習慣の変更、そしてコスモロジーの修正も強いられた。文明化したインディオとしての社会モデルを引き受けるよう促されたのである。

その後もヨスト (Yost, 1978) による記述によりそう暴力モデルが多様な文献で採用され、それぞれの著者の関心にしがって利用されていった。石油企業も (Maxus, s/a) ツーリズムの会社 (Smith, 1996) も、ワオラニについて殺人集団という創造された噂話をそれぞれのスタ

イルで再生産したといえる。

こうしたヤノマミとワオラニの事例から示唆されているのは、次のようなことではないだろうか。つまり、近代における彼らのアイデンティティ構築のありようは、外部エージェントの利害や役割、活動ぶりと極めて密接な関係をもっていたということだ。自然主義者や文化主義者の解釈にはこのようなアマゾン先住民に関する社会的・政治的な説明が含まれておらず、彼らは先住民たちの中核的な要素たる暴力や武器、狩猟に関する記述に専心していただけたことだった。進化主義と文化主義は手を携えて近代の原初主義的な神話を創造し、ヤノマミとワオラニは先祖代々より暴力的な存在だとされたのである。

アマゾンにおける「先住民の獰猛性」が歴史的に構築されたことにより、彼ら自身の変容プロセスはいっそう堅固なものになった。ヤノマミとワオラニの場合にしても、「先住民(indígena)」というカテゴリーがかつての非対称性、従属性といった特徴をあらためて担うことにつながっている。文明化されたインディオとして、アマゾン先住民たちは国家社会の一部を形成するようになったとしても、その文化アイデンティティ故に一方では排除の対象となる二級市民としての話でしかなかった。

文明化の長いプロセス、その最終局面はアマゾン先住民を世界システムに結びつけることだ。つまり遠隔地における労働力予備軍として、あるいは自然—文化両面におけるエキゾティズム(exotismo)、あるいは未開主義(primitivismo)といった歴史の残り香としての接合ということである。

【社会人類学、世界システム】

ヤノマミとワオラニに対し、民族誌においても思考の枠組の問題としても、自然主義、文化主義いずれの見方も避けるような選択肢をみいだそうという努力はこれまであまりなされてこなかった。ただ、エクアドルの場合には1990年代にラウラ・リバルが詳細な民族誌を発表し、そこではワオラニをアマゾンのコンテクストにおける社会的行為者として扱う方法を優先させていた。このリバルの努力により、ワオラニの暴力は社会秩序を決定づける要因のひとつだと理解されるようになったのである(Rival, 1996)。

実際の活動であれ、実質をともしない象徴的な次元のものであれ、リバルはワオラニにおいて存在する暴力的な死を避けることなく明確に捉えていた。それは文化的、社会的なことがらが織物のように縫い合わさったものであり、それが暴力という伝統の再生産に道をひらき、またその再生産された伝統が社会秩序に変換され、戦争の季節、平和の季節という形に変換されるというのである(Rival, 1996:77-88)。

こうした社会人類学的なアプローチの影響を受けて、ワオラニの社会システムや政治、歴史についての研究が数多く生まれるようになっている(Narváez, 1996; Toscano, 2001; Rivas y Lara, 2001)。

ここで広い視野に立ち、ウォーラーステインの提起するところに従って(Dussel, 2001)、中心の利害関心に規定される世界システム周辺の歴史を認識した上でなら、次のように言うこと

も可能だろう。進化主義的な自然主義や文化主義的な傾きをもつ祖先主義（ancestralismo）というのは、経験的な現実よりもヨーロッパのエスノセントリズムに基礎づけられた西欧的カテゴリーを構成しているのではないかということだ。

そうなれば世界各地の民族紛争（アマゾンのそれを含めて）にしても、それは植民地化と脱植民地化、自然資源のさらなる引き剥がし、不完全な、もしくは無きに等しい国家の行動などの社会的効果として考えるのが妥当なようにもみえてくる⁽⁶⁾。

ラテンアメリカの国家なき社会は、その固有の他者性や歴史性についてほとんど権利をもたない主体・集団として、世界システムの舞台に姿を現している。かつてリベイロはアマゾン先住民に言及する際「文明のフロンティアたる先住民」としていたが（Ribeiro, 1972）、今日では「グローバル化のフロンティアたる先住民」（Toledo, 2003）と再定義した方がよいのかもしれない。

【支援モデルとタゲリ】

すでに接触を終えたワオラニたちは、現在複数のリーダーや親族、石油企業その他、多種多様な関係を取り結ぶようになっている。そこで目をひくのは資源を求めてやまない世界システム、そして野蛮性というエスニックなラベリングである。こうしたコンテキストのもとでは、ワオラニの「部族的エトス（*ethos tribal*）」は自らの利害関心と外部のそれとが結びつく相互関係のゲームとして定義される。

ワオラニのエスニシティは多様な関係、交渉の産物だが、それは規範的枠組としての支援モデルに結びつけられる形で生まれたものであり、その支援モデルはワオラニを外部の活動につなげていくものである。近代のエージェントはワオラニの政治的カウンターパートとして姿を現す。そこで問題なのは、このモデルは先住民を管理するモデルのひとつだということである。物心両面において先住民の要求する空隙を埋め、そうした状況が浸透するにつれ、ワオラニ側の政治的思惑が生まれる可能性もあり、そうすると自然資源やワオラニを象徴的に示す各種の表象、民俗文化の要素などが外部に流出していくことにもなる（Rivas y Lara, 2001:47-70）。

こういう近代の管理モデルはある種の亀裂を抱えており、おそらくその中で最も重要なのは持続可能性の欠如、再生不可能な自然資源、主として石油の扱いを自由放任にした場合の持続可能性の欠如だろう（Ibid.）。さらにもうひとつ重要な亀裂として、ワオラニには未接触グループが存在しているということがあげられる。彼らの文明に対する拒絶は、依存と従属という接触ずみの親族グループが甘んじている現状に大きな影響を与えるものである。

大きな変貌をとげたワオラニたちにとって、未接触グループがある一定範囲の森ににいるということは、テリトリーを守っていく上で支障となる面があるのかもしれない。とはいえ、その同じ未接触グループの存在が外部からの活動拡大を困難にさせていることにより、彼ら自身の現下の政治的・経済的再生産が可能になっているという面もある。

【2003年5月の出来事】

アウカ街道の末端、パスタサ県に位置するティウイノは、パスタサ県奥地にあった定住地

ゴロンドリナとサピノから1980年代にやって来たワオラニによってつくられた集落だ（Rival, 1996:27）。そのリーダーは当時よりバベという人物で、ワオラニの中でも成熟した「大人の」男性である。

バベはいかにも大きな拡大家族の家長という風情で、強いられた文化の変容という試練をくぐり抜け、近代のエージェントとも恒常的に接触を続けてきた人物である。かねてより周囲に石油関係者が入っていたこと、そして近くにティウイノ川が流れていること、この両者がバベイリ（*babeiri* バベ・クラン）がワオラニの間で支配的な支援モデルに入り込む構造的な要因だといえる。石油関係者が現地に腰を落ち着けることで、ワオラニ・企業間の協定は確固としたものになる。またティウイノ川はツーリストと木材伐採人の玄関口にもなる。そういったよそ者の活動が集落の男たちや親族グループにとってはある種の呼び水に、つまり物質的、金銭的、象徴的な利益獲得に向かう戦略的な意志決定の呼び水になっていくのである。

ティウイノ集落はワオラニのテリトリーの境界線上に位置しており、そのことが自然界のもたらす富、あるいは文化的なエキゾティシズムを求める外部世界のエージェントには無視できない魅力となっている。「タゲリータロメナネ不可侵領域」⁽⁷⁾に近いことから、この地に暮らす親族グループは90年代を通じて未接触グループに接近しようとしていた。そこにはティウイノのワオラニ自身の好奇心に加え、「野蛮人の生活」を記録に残したい、あるいは広く一般に注目を集めるテーマにしたいというような外部からの圧力も関わっていた（Cabodevilla, 1999）。

そのことと並んで、テリトリー内に*cohuori* がいれば彼らは暴力で拒絶するというメディアの報告により、タゲリやタロメナネ、さらにまだ他にいるであろう同様のクランも世間の注目を集める重要な存在になっていたという事情もある。また、そういった未接触グループがティウイノ周辺地域で展開されている石油や材木、ツーリズム関連活動の障害物になってしまうのではないかという懸念も生じていた。

このような関係性を抱え込んだコンテクストのもとで、文化的な裏付けをもつ要因、そういう実質的な裏付けをもたない表象のレベルでの要因に加え、外部からの強制的な圧力によって、ティウイノのワオラニとタゲリの紛争という現実の出来事が生みだされたのである。1993年、ティウイノの1グループがタゲリを襲撃し、娘をひとりさらい、さらに槍やシグラ（*shigras*, 訳者註：ヤシの繊維で作成されたネット状のショルダーバッグ）その他を奪った。カプチン修道会のミッションによる強引な和解工作により、襲撃者側は娘を返還したが、タゲリの待ち伏せに遭遇したメンバーのひとりには命を失う（Cabodevilla, 1999）。その10年後⁽⁸⁾、ティウイノおよび別の集落からのワオラニが9人、93年に殺された故人の復讐としてタゲリの定住地（に見える場所）を襲撃、タゲリ・グループの男女、子どもまで含めて少なくとも26人を槍で突き殺した。その中のひとりについては首まで切断し、さらに家に火をつけ、ハンモックや槍、鳥などを奪い去ったのである。

ワオラニが自分たちの部族内関係を捉える際、近代のエージェントとの間で維持されている非対称的な関係がそのベースになっていることを想起すれば、次のようなことが言えるのでは

ないだろうか。バベイリ、タゲリ間の敵意というものも、接触ずみのグループと交渉をもつ外部世界の利害関係がベースとなっていてできあがったものではないか。

【効果と影響】

タゲリ（あるいはタロメナネ）をめぐる襲撃と死をエクアドル・アマゾンの自然資源開発をめぐる社会政治的コンテクストから分離しようとしても、そこには限界があるようにみえる。ティウイノ地域では石油への思惑や実際の採掘活動は今にはじまったことではないし、それはツーリズム開発にしても同じことだ。さらに近年、こういう古株たちの他に外部からの新参組も新たに加わっている。この地域の豊かな森に関心をもつ木材業者である（Rivas y Lala, 2001:86）。

ワオラニのテリトリーが石油と森という豊かな資源を抱えていることで、この地域は恒常的に不安定な状態にある。定期的に空を舞う石油関係者のヘリコプター、川伝いにやってくるツーリストたち、森林伐採を目的とするキャンプ地設営⁽⁹⁾——こういった現実が、外部からの活動が絶え間なく拡大しつつあるという印象をもたらしている。

ティウイノの村人たちを含めて、ワオラニの人々は森を自由に歩ける土地の所有者として、外部エージェントに対してリーダーシップを発揮できないかと考え（「ビッグ・マン」の登場）、外からの人間を入れる許可を与える代わりに物質的利益を獲得するメリットを見いだしている（Rivas y Lala, 2001:58）。

しかし、そういう試みの帰結はワオラニと石油関係者、木材業者を巻き込んだ暴力事件の頻発であった⁽¹⁰⁾。リバルが述べるように（Rival, 1996:74）、外からの大がかりな干渉や近代との暴力的な接触こそがワオラニ内での戦争の可能性を高めているのではないだろうか。

1993年の事件以来、バベイリとタゲリの間で続いてきた抗争は伝統的な文化にもとづいているとしても、タゲリへの憎悪をそれだけの理由に帰することはできない。タゲリが存在自体が木材伐採やツーリズム活動の範囲を限定づけることになり、一方でティウイノの複数の親族グループはそうした活動から利益や恩恵を、あるいは雇用を得ている事情があるからである。タゲリ、もしくはタロメナネの26人におよぶ殺害以降、ティウイノ地域や他のワオラニのテリトリーにおいて、タゲリに近いグループ、そうでないグループに分かれて復讐合戦が開始されるのではないかという懸念も強まっている。ワオラニをとりまく新たな状況からしても、殺害された未接触グループの親族たちにしてみれば、仕返しをして虐殺の実行犯とおぼしき者たちに死をもたらしたいことだろう。

このような血なまぐさい空気については、ふたつの見方が成立するようにみえる。これは文化に裏打ちされた戦争であって、ワオラニたちは先祖伝来の方法で正義を実現しているのだという見方、あるいはタゲリ・グループの殺害に参加した戦士たち以外の関係者ともつながりをもつ、先住民の範囲を越えた地域紛争だという見方である。

歴史的な事実からすると、地域紛争以外の何ものでもないとして一連の出来事を見るのが妥当であろう。「先祖伝来（“ancestral”）」と語られる戦争は、資源採取の絶頂期においてこそ起

こっている。そしてワオラニは国家社会と多様な関係をもたざるをえない時代に直面し、その中において彼らの役割やエスニシティは資本主義的な資源採取、保護区域だという法律上の宣言、その運営計画の不在、そして先住民の権利に対する認識の希薄さなどが際だつような論理、つまりエクアドル・アマゾンの土地専有をめざす論理にもとづいて定められているのだから (Rivas, 2001)。

1998年に承認されたエクアドル憲法と先住民の集団的権利という観点からすると、タゲリへの虐殺は通常の司法と先住民の伝統、その両者の範囲と限界をめぐる議論を喚起するものである。

ここで次のことを明記しておくのは重要であろう。どのような法的プロセスを採用しうるかという問題について、ティウイノのワオラニは彼らだけにあてはまる固有な動機を主張して当の襲撃を正当化しているということだ。仲間ひとりの死に対する復讐ということだけで、2003年の襲撃を十分に正当化できるというのである。その語り口は本質主義的で文化主義的である。死をめぐる伝統にしか言及しないのでは、その出来事をティウイノという特定の集落をめぐる状況やワオラニのテリトリー全体の地域的な諸条件といった論点に関連づける選択肢が消えてしまいかねない。

ところがエクアドルの法執行者たち、検事や鑑定人、法務関係の役人たちは虐殺行為のさらに背後に潜むものを見ようとはせず、それまでの歴史を分析したり再検討したりすることもしないで、ただ裁きを与えることを約束している。エクアドルの司法当局は容疑者に対する法律上の制裁を加えた場合に、その反動がどういふものになりうるか理解していないようにみえる。ティウイノで警察による捜査などを行ってしまえば、さらなる暴力が喚起される可能性がある。

それとは対照的に、エクアドル・アマゾン・ワオラニ先住民組織 ONHAE (Organización de la Nacionalidad Huaorani de la Amazonía Ecuatoriana) はこの出来事に対して明確な態度を示している。通常の法の執行には反対するが、襲撃自体は非難されるべきなので、バベイリを懲罰にかけるか赦免するかを決定するワオラニ長老会議 (*piquenani*) を召集するというのである⁽¹¹⁾。

すでに述べてきた一連の出来事を前にして、ONHAEはワオラニを代表する結節点のごときものとして登場している。とはいえ、政治的な復権プロジェクトの構築よりも石油開発の方により貢献しているような先住民組織では、どうにも力が弱すぎるのも事実である。

もし仮に虐殺の犯人だと特定されたワオラニに法的な制裁が加えられるとすると、次のような疑問がわいてくる。つまり、エクアドルの法というものは、先住民絡みの事柄についてはその職務を果たそうとするのに、どうして石油関係の環境破壊に対する訴えや石油採掘契約に絡む汚職、あるいは木材業者の不法侵入といった事柄についてはそうでないのかということだ。その答えの鍵は現行の世界システムにおける先住民の位置づけにある。つまり、彼ら先住民というのは、自らの歴史や文化的な価値、あるいは社会政治的な諸条件などについて顧みられることのないまま、近代の文明システムに結びつけられてしまった集団だということである。

エクアドルの新聞雑誌で流布されている一連の出来事に対するメディアの解釈、それはインターネットで世界にも発信されており、その種の情報を取り急ぎ収集してみると、タゲリへの

襲撃というものが、インディオとアマゾンという空間に対するエクアドル社会の偏見をどれだけよみがえらせてしまったかがわかる。それは「未開性(Primitivismo)」「無法なインディオ(indios sin ley)」「侵略者(agresivos)」「流浪の民(nómadas)」「戦士集団(pueblos guerreros)」⁽¹²⁾といった語彙や表現がワオラニというアマゾン先住民を一般向けに紹介する際に使われていることに示されているよう。

エクアドル国民の意識において、先住民という存在はフォークロア研究(言語、衣裳、もしくは伝統といったエッセンシャルな特徴を特権化するようなインディオの見方)にも近い文化主義的な認識から、人種的、言語的、社会的な偏見を媒介に彼らの固有性や権利を否定するような見方まで、その両者の間を行き来しているように見える。ワオラニを前にしたエクアドル社会の動向をみていて思うのは、先住民というのは、特にアマゾンのそれについては、世界システムの周辺であり、文明の境界であり、そしてエクアドル近代の願望を表す存在ではないかということである。

【結語】

エピローグにかえて、ここでは次のような疑問を表明しておきたい。アマゾンの部族戦争なるものは、近代の侵入という大きな災厄の効果なのではないか？この2003年の事件を通過したワオラニの諸クランは、平和の季節に向けて落ち着いた生活をとりもどすことができるのだろうか？仮にそういうことが起こるとすると、それはどのようにしてなのだろうか？多国籍企業の利害関心や多様な政治的思惑に包囲されているONAHEは、自らの固有な政治的プロジェクトを構築していけるのだろうか？そうだとすると、それはどのようにして実現されるのだろうか？

こうした疑問については、これからの年月で起こる出来事がどういう経過をたどるのか、そこで明らかになっていくことだろう。新たな分析の成否はこれからの民族誌研究の構想と実行にかかっている。とはいえ、まずはアマゾン先住民をめぐる複雑な状況に立ち向かえるパラダイムを新たに発展させることである。

おそらく、分析上必須の参照項としては世界システムとグローバル化があげられよう。そういった思考の枠組をもとにした学際的な研究こそが新たな解釈を照らしだし、現代の民族誌的、政治的現実とも齟齬をきたさない行動のスタイルを可能にしていくのではないだろうか。

【註】

1. メキシコ市立社会人類学高等調査研究センター(CIESAS)社会人類学部門担当官。エクアドル生態学研究 エコ・サイエンス財団とのプロジェクトにおいて、1999年から2001年にかけてワオラニの調査を行っている。
2. この事件をめぐるメディア報道には様々なバージョンがあり、事実関係についての情報は不確定で矛盾あっている。とはいえ、情報源としてはそういった材料を使わざるをえない。
3. たとえば、リベイロはブラジル全土で孤立して暮らしていた先住民の半分以上が1900年から1950年の間に接触を果たしたと報告している(Ribeiro, 1972)。

4. シャノンの命名はこのようなものであった (Chagnon, 1968)。
5. ヨストの表現による (Yost, 1978:11)。
6. たとえば、フツ (農耕民) とツチ (牧畜民) が敵対した1990年代のルワンダ内戦の場合、国際的には「先祖伝来のエスニックな戦争」の1事例として扱われた。ところが、初期の研究を再検討してみると (Maquet, 1952)、外部状況と直接つながっている社会的、軍事的、領土的な階層化にもとづく社会秩序こそが、そのような対立の温床だったということが読みとれる。
7. 1999年の大統領令によりつくられた自然保護区域の比喩的表現である。
8. エクアドルの様々な活字メディアに加え、*El Universo* や *El Comercio*, *Hoy*, *Expreso*, *Extra*, *La Hora* など、2003年5月29日から6月10日にかけての電子版日刊紙による。
9. ワオラニ・テリトリ管理運営プラン (el Plan de Manejo del Territorio Huaorani) の情報による (Lara, et al. 2002; Narváez, 2003)。
10. 近年のティウイノでは、次のような暴力事件が起こっている。2000年に石油関係者が1人、2002年には木材業者が5人、タゲリにより槍で殺害されている。また同じ2002年には遺体となったワオラニの女性が1人、そして数人が怪我をした状態で木材業者のカヌーに置き去りにされていた事件もあった。
11. ONHAEの会長アルマンド・ボヤ氏は次のように述べている。「我々はこの虐殺の件について、検事や判事など、当局が介入しないよう求めている。制裁を加えるのは唯一ONHAEとそのもとで開かれる長老会議だけであるのが望ましい。制裁が必要なことであるとしても」2003年6月24日付 *El Universo* 紙より。
12. エクアドルの活字メディアや *El Universo*, *El Comercio*, *Expreso*, *Extra* など、2003年5月29日から6月5日にかけての電子版日刊紙をもとに短時間で拾い上げた表現の一部である。

【参考文献】

- Appadurai, Arjun, 2001, *La modernidad desbordada. Dimensiones culturales de la globalización*, Ediciones Trilce, Fondo de Cultura Económica, Buenos Aires.
- Bonfil, Guillermo, 1972, *El concepto de indio en América: una categoría de la situación colonial*, Anales de Antropología, Volumen IX, México.
- Cabodevilla, Miguel Ángel, 1999, *Los huaorani en la historia de los pueblos del Oriente*, CICAME, Coca.
- Cardoso de Oliveira, Roberto, 1972, *Urbanización y tribalismo*, Instituto Indigenista Interamericano, México.
- Chagnon, Napoleón, 1968, *Yanomamo. The Fierce People*, Holt, Rinehart and Winston, Estados Unidos.
- Dubaele, Bertrand, 1997, *Los huaorani y el desafío de la modernidad*, FEPP, OIT, Sin edición, Ecuador.
- Dussel, Enrique, 2001, "World-System and the Limits of Modernity" *The Cultures of Globalization*, Jameson Fredic y Miyoshi Masao, editores, pp. 3-31, Duke University Press, Nueva York, Durham, Carolina del Norte.
- Gluckman, Max, 1963, *Order and Rebellion in Tribal Africa*, *The Free Press of Glencoe*, Nueva York.
- Godelier, Maurice, 1996, *La producción de Grandes hombres. Poder y dominación masculina entre los Baruya de Nueva Guinea*. Ed. Akal/Universitaria, Madrid.
- Harris, Marvin, 1995, *Antropología Cultural*, Alianza Editorial, Madrid.
- Kimerling, Judith, 1996, *El derecho del tambor*, Abya Yala, Quito.
- Lara, R., Pichilingue, E., Narváez, R., Moreno, P., Sánchez, G., Hernández, P., 2002, *Plan de Manejo de Territorio Huaorani*. Proyecto SUBIR (CARE) — EcoCiencia — sin publicar.
- Maquet, J., 1979, "tutsi" *Antropología Política*, Llobera Jose ed., pg. 317-322, Anagrama, Barcelona.
- Maxus Inc., s/a, *Procedural Manual for the Waorani Territory*, Orientation Program Community Relations, Quito.

- Narváez, Ivan, 1996, *Huaorani vs. Maxus. Poder étnico vs. poder transnacional*, Fundación Ecuatoriana de Estudios Sociales, Quito.
- Narváez, Roberto, 2003, Participación en el Foro Electrónico: “la justicia ordinaria en el resguardo de los derechos colectivos de los pueblos indígenas” *Ecuatoriana de Antropología Jurídica*, FLACSO-Ecuador, 25 de junio.
- Ribeiro, Darcy, 1996, *Os Índios e a Civilizacao*, Ed. Companhia das Letras, Sao Paulo.
- Ribeiro, Darcy, 1971, *Fronteras indígenas de la civilización*, Siglo XXI, Barcelona.
- Rival, Laura, 1996, *Hijos del sol, padres del jaguar. Los Huaorani de ayer y hoy*, Abya Yala, Quito.
- Rival, Laura, 1994, “conciencia nacional” *Imágenes e Imagineros*, Blanca Muratorio, editora, FLACSO-Ecuador.
- Rivas, Alex, 2001, “en la región amazónica del Yasuní: el territorio indígena Huaorani” *Memorias del Seminario Taller Conservación, Desarrollo y Etnicidad en el área del Parque Nacional Yasuní*. Organización de las Naciones Unidas para la Educación, la Ciencia y la Cultura UNESCO, Wildlife Conservation Society-WCS, Ministerio del Ambiente de la República del Ecuador. Quito-Ecuador.
- Rivas, Alex y Lara, Rommel, 2001, *Conservación y petróleo en la Amazonía Ecuatoriana. Un acercamiento al caso huaorani*, EcoCiencia-Abya Yala, Quito.
- Sahlins, Marshall, 1988, *Islas de historia. La muerte del capitán Cook. Metáfora, antropología e historia*, Gedisa, Barcelona.
- Sahlins, Marshall, 1979, “gran hombre, jefe: tipos políticos de Melanesia y Polinesia” *Antropología Política*, Llobera Jose ed., pg. 267-288, Anagrama, Barcelona.
- Smith, Randy, 1996, *Drama bajo el manto amazónico*, Abya-Yala, Quito.
- Steward, Julian H., 1955, *The Theory of Cultural Change: The Methodology of Multilinear Evolution*. University of Illinois Press, Urbana.
- Tierney, Patrick, 2002, *El saqueo del El Dorado*, Grijalbo, Barcelona.
- Toledo, Víctor, 2003, “Los Movimientos Indígenas y el Proceso de Globalización Económica” Universidad Arcis-Chile, Jornadas Latinoamericanas Movimiento Indígena, Resistencia y Proyecto Alternativo, Universidad de la Ciudad de México, Universidad Autónoma de México, Benemérita Universidad de Puebla, Centro de Estudios Latinoamericanos de la UNAM, México, 29 de mayo.
- Toscana, Morales, Santiago, 2001, *Violencia, dispositivos de gobierno y el desarrollo socioambiental: una genealogía sobre la construcción de la naturaleza espacial y el espacio social en la población Huaorani*, Pontificia Universidad Católica del Ecuador, Tesis de Grado, Facultad de Ciencias Humanas, Departamento de Sociología, Quito.
- Wallerstein, Emmanuel, 1988, *El capitalismo histórico*, Siglo XXI, México.
- Wolf, R. Eric, 1987, *Europa y la gente sin historia*. Fondo de Cultura Económica, México.
- Yost, James, 1978, *El desarrollo Comunitario y la Supervivencia Étnica. El caso de los Huaorani, Amazonía Ecuatoriana*. Cuadernos Etnolingüísticos, Nro. 6, Instituto Lingüístico de Verano, Ministerio de Educación y Cultura del Ecuador, Quito.

原 題：Sistema mundial y pueblos indígenas en la Amazonía. A propósito del ataque a los tagaeri

原著者：Rivas Toledo, Alex

出 典：Iconos. Revista de Ciencias Sociales [en línea] 2003, (017) pp.21-30.<<http://re-dalyc.uaemex.mx/redalyc/src/inicio/ArtPdfRed.jsp?iCve=50901703>